漢文教育における虚詞概念の導入

高戸　聰

はじめに

漢文を学習する際、初学者が戸惑う事項の一つに置き字がある。置き字は、原文には漢字として存在するが、漢文を訓読する時には読まれないため、学習者が戸惑いを覚える。さらに、同じ漢字が常に置き字として処理されるわけではなく、ある時には読まれある時には読まれないというように、扱いが一定していないことにも、学習者はよりいっそうの困惑を覚えると思われる。

それでは、どの品詞が置き字として処理されるのか。この点については、明確な線引きはない。なぜなら、置き字という言語現象は、古代中国語である漢文そのものに存在する問題ではないからである。置き字とは、日本で漢文を訓読をする際の独特な現象である、と言うことができるだろう。

一般に、置き字は、助字のなかの読まれないものとされている。それでは、助字とは何かや、どの品詞が該当するのかについて、明確な説明がなされているとは言いがたい。

小論では、漢文訓読に独特な言語現象である、この置き字について、漢文教育の場において、どのように説明す

れば学習者が理解しやすいかについて、虚詞という中国語文法上の概念を用いることで、解決ができないか考察する。

一　置き字について

本章では、置き字について、まずは確認していくこととする。置き字について、現行の高等学校教科書である、『新訂国語総合　古典編』では、以下のように説明している。

訓読するとき、読まない助字を置き字という。その字そのものは読まないが、その文章上でのはたらきは、上または下の字の送り仮名で示されることが多い。ただ、それらの字は、常に置き字となるわけではなく、読むか読まないかは、文の構成や意味、訓読したときの調子で決まる。(1)

この高等学校教科書では、置き字は助字の中で読まれないものを指すとされる。また、読む読まないは文の構成・意味や調子で決まる、とされている。ただ言い換えるなら、置き字は品詞ではないので、一定の用法があるのではなく、状況に応じて置き字として処理したり、読んだりするということでもある。

ある字を置き字として処理するか否かについて、「読むか読まないかは、文の構成や意味、訓読したときの調子で決まる」としているが、ある字を置き字として処理しても、置き字としないで読んだとしても、いずれにしても語法上正しいことが多くある。

例えば、漢文学習の際、必ず使用される『論語』学而篇の劈頭「学而時習之」の箇所は、普通「学びて時に之を習ふ」と訓読される。ただ、同じ箇所を「学び而(しこう)して時に之を習ふ」と訓読しても、語法上間違いとは言い切れないであろう。

置き字の持つこのような曖昧さは、漢文学習の際に直面する、障害の一つと言うことができる。そのことは、学習参考書でも、つとに指摘されている。次に、『漢文学習小事典』の「置き字」の項を以下に引用しよう。

日本での言い方で、広義の助字のうち、ふつう訓読しないものをこう呼んでいる。①文末の「焉・矣・兮」など、②文中の「於・于・乎」など、③文中の接続詞「而」などが代表的で、これらに相当する訓がないために出たことば。古くから「虚字トハ於字ニテ、読マヌ字ナリ」〈筌蹄集〉・「手爾葉は唐土の置字なり」〈手爾波大概抄〉などと言われてきた。しかし具体的な文字は一定していない。捨て字・黙字などともいうが、ともに、あいまいなことばである。[2]

やはり、「具体的な文字は一定していない」「あいまいなことば」である、とされている。

言語活動そのものは、固定的かつ規則的なものではなく、常に能動的に変化し、文法や語法を逸脱した用法が認められるものであろう。ただ、漢文は古代中国語であり、そのテキストは固定されている。さらに、この漢文を教育に利用するからには、漢文を学習する場あるいは漢文を教える場で、曖昧さがあることは、なるべく避けるべきであろう。

とは言え漢文を、原文の古代中国語から現代日本語に直接に翻訳するのではなく、原文の調子を生かした形で読み下している以上、訓読する上でどこかに曖昧さが発生することもやむを得ない。

そこで問題となるのは、置き字の持つ曖昧さはひとまず措き、その説明の仕方であると思われる。何となれば、置き字とは日本の訓読に特有の言語現象であり、置き字なしで訓読をすることもできないからである。

それでは、置き字を理解する際の困難は、どこにあるのだろうか。置き字の持つ曖昧さを改めて指摘すれば、どの字が置き字とされるか固定していない、置き字として処理する際の基準が明確でない、ということであろう。

ところで、置き字は助字の中の読まないものであるとされていた。どの品詞が置き字とされるかは明確ではない

が、大きく助字という分類に区分されているのである。そこで次章では、助字について確認していく。

二　助字について

置き字は品詞の一つでなく、「広義の助字のうち、ふつう訓読しないもの」とされていた。本章では、この助字について確認していく。

まず前章でも引用した高等学校「国語総合」の教科書では、

文中や文末にあって、疑問・断定や接続などの意味を添える文字を助字という。[3]

としている。「疑問・断定や接続などの意味を添える文字」と言うのみで、どの品詞が含まれるのかや、各品詞との関係については言及していない。

次に『漢文学習小事典』から「助字」の項を引用する。

狭義には、十一品詞の中の一つ（助詞）。広義には、代名詞や副詞を含んだ虚字とほとんど同じに使われる（この場合、中国ではふつう「助辞」と言う）。教科書では「返読文字・助字・再読文字」などと分類するが、これはあくまで便宜的なもので、これら「返読文字・助字・再読文字」は、いずれも広義には助字である。[4]

助字とは、狭義では助詞、広義では「虚字」であるという。助字を狭義の意味で助詞と捉えることは、置き字との関係から考えた場合、不適当であろう。もちろん、助字を助詞という意味で捉えることがあることは否定しないが、助字を狭義で捉えることは、話を複雑にするだけで、置き字の理解に資することがないからである。

では、助字を広義の意味で捉えた場合はどうであろうか。広義の助字は、「代名詞や副詞を含んだ虚字」とほぼ同じであり、中国では「助辞」とも言うとされる。さらに、教科書では「返読文字・助字・再読文字」などとも分

類するが、「いずれも広義には助字である」とされる。

返読文字という言い方は最近あまりしないと思われるので、『漢文学習小事典』から当該の項を引用し説明する。

訓読を学ぶときの便宜上の用語。漢文を訓読して日本文としてみたばあい、①述語的な働きをしていながらその主語の上につく、②助詞・助動詞など付属語的な働きをしていながら、自立語的な語の上につく、③体言や、被修飾語的でありながら、修飾語の上につく、などの働きをする漢字がある。[5]

また当該の項では、「返読文字」として以下の漢字を挙げている。

不・非。有・無・勿。多・少、易・難・可・不レ可。欲。為・為。毎。雖。所・所以。以。自・従。与。如・若、不レ如・不レ若。不レ能。見・被。使・令・教・遣。

一見して分かるように、否定詞・形容詞・助動詞・介詞・副詞・接続詞・助詞など、多様な品詞に渉っている。さらに、返読文字と言った場合、形容詞をも含んでいる。つまり、返読文字も含む助字は、品詞としては多くの品詞を含み、文中のはたらきとしては多岐にわたる、広範かつやや曖昧な分類であるということができると思われる。

ここで置き字と助字の関係をまとめると、置き字はそもそも漢文を訓読する際の日本語独特の言語現象であるため、原文の古代中国語の品詞とは直接関わりない。そのため、どの品詞を置き字にするのかという基準も存在しない。さらに、同じ字を、置き字として処理したり、読んだりすることについても、「文の構成や意味、訓読したときの調子で決まる」という、明確な基準のない、曖昧なものであった。

それでは、助字についてはというと、「訓読するとき、読まない助字を置き字という」とあったように、置き字よりも上位の分類であり、「疑問・断定や接続などの意味を添える文字」で、「代名詞や副詞を含んだ虚字」で返読

文字も再読文字をも含んでいた。品詞としては、副詞・接続詞・助詞・助動詞、さらには形容詞までも含むとする見解まであった。文中でのはたらきに着目しても多岐にわたっており、助字は、広範かつやや曖昧な分類であった。

古代中国語である漢文を訓読する際に、ある程度の曖昧さが残るのは仕方が無いことであるとは言え、置き字と助字の持つこの曖昧さは、次のような問題に直面した時、説明するのに困難を伴うだろう。

中学・高校の教員採用試験の問題集[6]に以下のような設問を見出すことができる。

授業の中で、生徒から「助字・置き字とは何ですか」と質問された場合、どのように説明するか。本文[7]中から例を挙げて、分かりやすく説明せよ。

この問いに対して、解説では「助字の働き、助字と置き字の関係を明確に説明することがポイントである」としている。

中学・高校の教員採用試験の問題集で、このような設問があるということは、置き字と助字の関係について、学ぶ側・教える側ともに躓きやすいポイントである、と認識されていることを物語っていよう。

次に、この設問の解答を引用しよう。

助字は、主として日本語の助詞・助動詞・接続詞、英語の前置詞に相当する働きをする漢字である。本文で使われている「而」のように、文中にあって語句の接続関係などを示したり、「也」のように、文末にあって断定や詠嘆などの意を表したりする。訓読の際に読まない助字を「置き字」といい、第一段の「馬駑キテ」や「輟メテ」の直後にある「而」、「未ダ之ヲ用ヒザルニ」の直後にある「也」や第一段の最後にある「也」が、これに該当する。[8]

置き字を助字のなかの読まないものであるとする点は、これまでに確認してきた内容と同じである。また、助字に属する品詞として、助詞・助動詞・接続詞に加えて、「英語の前置詞」が挙げられている。日本語に前置詞は存

在しないため、わざわざ「英語の」という必要があるものと思われる。

ここで問題となるのは、やはり助字についての説明である。まず、助字に包含される品詞の説明が不統一かつ不十分であること、次に、助字のはたらきについて、「接続関係を示したり」、「文末にあって断定や詠嘆などの意を表したりする」というに止まり、結局どういうはたらきをする分類を助字と呼ぶのかに答えられていないことである。

助字についての説明が不十分であれば、必然的にそこに含まれる置き字についても、理解を得ることは難しいと考えられる。

第一章で述べたように、助字には、ある字を置き字として処理しても、置き字とせず読んだとしても、語法上どちらも正しいことが多く存在する。置き字あるいは助字の持つこうした不統一や「ゆれ」は、漢文を教える側にも学習する側にも、一つの障害となることが予想される。次章では、この「ゆれ」について、先行研究に依拠しつつ述べていくこととしたい。

三　漢文訓読の「ゆれ」

漢文訓読をする際の、「高校生の自発的な漢文学習を妨げる要因」として、塚田勝郎氏は、以下のように指摘する。

日常、生徒から「どちらの読み方が正しいのか。」とか「どちらの表記がよいのか。」という質問を受けることがあるが、これは訓読の原則や訓点処理の不統一に接した、彼らのとまどいや不安をよく表している。(9)

氏は、このように指摘した後、「解釈の相違には至らない訓読の違いや表記のばらつき、不統一を訓読の「ゆれ」

と総称[10]する。小論も今後は、塚田氏の定義にしたがい「ゆれ」と呼ぶこととする。

そのうえで塚田氏は、平成十六年度用「国語総合」教科書七社十点に収録されている「矛盾」を材料として、訓読の「ゆれ」を調査し、以下のように言う。

これらの違いは、いずれも各社の訓読の原則や表記の方針に由来するもので、解釈に大きく関わるものなく、通常は「どちらでもよい」とか「習慣の問題だ」として処理されるものばかりである。しかし、このような訓読の「ゆれ」が、高校生の漢文学習にとって大きな障碍になっていることは想像に難くない[11]。

漢文訓読の際に「ゆれ」があることは、学ぶ側である高校生たちにとって、「とまどいや不安」を感じる「大きな障碍」になっている、というのである。

「ゆれ」があることは、学習する側である高校生の漢文離れを加速させるばかりではない。塚田氏は、「漢文指導に苦手意識を持つ教員」が増加している、という。「一人あるいは二人で「国語総合」を担当するケースでは、現代文・古文に比べて漢文の時間が少なくなる」とし、その原因について、以下のように言う。

このような教師の漢文離れともいうべき現象は、教員養成課程において漢文専修の学生が少ないことに起因し、漢文の教えにくさがそれに拍車をかけていると考えられる。端的にいえば、漢文教材の未整備や不統一な点が、「漢文は教えにくい」という恰好の口実となっているのである[12]。

漢文訓読に「ゆれ」があることによって、教える側にも苦手意識が植え付けられてしまっているのである。もちろん、「恰好の口実」という側面もあるだろうし、漢文離れの原因が、訓読の「ゆれ」にのみ帰せられるものでもないだろう。

しかし塚田氏は、

漢文離れを防ぐためには、とりわけ訓読の「ゆれ」解消のための努力が肝要である。訓読の「ゆれ」をいつま

でも「流儀や習慣による」で済ませてはいけないし、そのような言い訳にはなんの説得力も持たない。[13]という。

学習する側のみならず教える側でも漢文離れの起こる原因が、全てではないにしても、訓読の「ゆれ」にあると考えられる以上、「ゆれ」を解消するための努力が必要であるとする点、筆者も賛成である。

小論で検討している、助字や置き字についても、塚田氏は訓読の「ゆれ」を指摘する。

会話文の末尾に「矣」や「焉」のような訓読しない助字がある場合の「ト」の位置についても、考え方が大きく対立している。「国語総合」教科書では、「不読の助字の前」派が七社、「不読の助字の後」派が三社であるが、「前」派は会話文末の助字を読むかどうかの見極めに効果があることに意味を見いだし、「後」派は会話文末の助字の意味に注意させることに重きを置いているようである。[14]

会話文の末尾の訓読しない助字とは、「矣」や「焉」という以上、置き字のことである。

この置き字と助字について、曖昧さや「ゆれ」があることは前章までで検討した。教える側の漢文に対する苦手意識の原因の一つとして、塚田氏によれば、漢文の教えにくさが挙げられていた。教えにくさの原因は、漢文訓読の持つ「ゆれ」や曖昧さである。前章で挙げた中学・高校の教員採用試験の問題集に、置き字と助字の関係を説明させる設問がある以上、やはり置き字と助字の説明に存在する「ゆれ」や曖昧さは、解消されるべきであろう。

それでは置き字や助字を、どのように説明すれば、理解しやすいのだろうか。次章では、この点について検討していく。

四　助辞と虚詞

本章では、まず助辞について確認する。なんとなれば、第二章に挙げた『漢文学習小事典』には、助字について、「広義には、代名詞や副詞を含んだ虚字とほとんど同じに使われる（この場合、中国ではふつう「助辞」と言う）」とされており、助字・虚字・助辞はほぼ同一の概念である、とされていたからである。

助辞について、『漢文学習小事典』では項目が立てられていないので、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』から引用しよう。

漢文にはまた別に助辞（または助字）というのがある。助辞というのは單獨では實質的内容のある意味をあらわさず、他の實辭や文に結びついて、その語や文の意味を充實させるもので、「雖」「則」「也」「乎」「者」などがこれである。これらの語も、或いは他の語との關係において、或いは文章のなかで果す役割において、それぞれの位置がきまっている。[15]

『漢文学習小事典』と同じく、括弧付きながら、助辞と助字は同一の概念であるとされている。助辞は、それ自体実質的な意味を持たず、他の「實辭」に結びついて、「その語や文の意味を充實させる」。実例として、「雖」・「則」・「也」・「乎」・「者」が挙げられている。それぞれの品詞について、「雖」と「則」は接続詞、「也」・「乎」・「者」は助詞と考えられる。「その語や文の意味を充實させる」点については、第二章で引用した高等学校教科書『国語総合』の「疑問・断定や接続などの意味を添える文字」という解説と、おおむねその主旨は重なると思われる。

次に、『漢文学習小事典』から「虚字」の項を引用する。

単語を、意味や文法的な働きの上から、実字・虚字に二分する。本来、実質的な概念を表さず、単独では文になりえず、文法上の働きをするものを虚字と呼ぶ。介詞（前置詞）・連詞（接続詞）・助詞・嘆詞（感動詞）な

どは、ふつう虚字に分類される。数詞・量詞・代詞・副詞などは、実字・虚字のいずれに属させるか、諸説がある。[16]

単語を、「実字」と「虚字」に二分する。そのうえで、「単独では文になりえず、文法上の働きをするものを虚字と呼ぶ」とする。

「虚字」は、中国語文法では「虚詞」と呼ばれている。『古代汉语虚词通释』では、副詞・介詞・連詞・助詞・語気詞・助動詞・感嘆詞・代詞・不定数詞を、「虚詞」として挙げる。[17]『漢文学習小事典』で「実字・虚字のいずれに属させるか、諸説がある」とされていた、数詞・代詞・副詞をも「虚詞」に含めている。

それでは現代中国語の語法では、「虚詞」をどのように説明しているのだろうか。『实用现代汉语语法（增订本）』では、以下のように定義している。

語法の機能に基づくと、まず単語を実詞と虚詞の二つの大類に分けることができる。実詞は文になることができる成分であり、一般的に実在の語彙意味を持っている。実詞は、名詞（時間詞・場所詞を含む）・動詞・形容詞・数詞・量詞・代詞・副詞の七類に分けることができる。虚詞は一般的に単独で文になることができない成分であり、主に各種の語法上の意味や語気・感情を表現する。虚詞は介詞・連詞・助詞・擬声語の四類に分けることができる。

根据语法功能，首先可以把词分为实词与虚词两大类。实词能充任句子成分，一般具有实在的词汇意义。实词下又可以分为名词（包括时间词、处所词）、动词、形容词、数词、量词、代词、副词、七类。虚词一般不能单独充任句子成分，主要表达各种语法意义或语气、感情。虚词下又可以分为介词、连词、助词、象声词四类。[18]

それぞれ「実詞」は「文になることができ」、「実在の語彙意味を持っている」もので、「虚詞」は「単独で文になることでき」ず、「語法上の意味や語気・感情」を表すものとされる。この「虚詞」の定義は、『漢文学習小事典』

の「虚字」の定義と、ほぼ同じである。

『漢文学習小事典』で「諸説ある」と言われていたように、『古代汉语虚词通释』では「虚詞」に含まれていた数詞・代詞・副詞は、『实用现代汉语语法（增订本）』では「実詞」に入れられている。日本の漢和辞典である『全訳漢辞海　第三版』[19]も、『实用现代汉语语法（增订本）』同様、数詞・代詞・副詞は「実詞」に分類している。なお、三浦勝利『漢文を読むための助字小字典』[20]では、副詞と代詞を、「実詞」と「虚詞」の中間に位置する、としている。これらの品詞をいずれに分類すべきか、にわかには判断し難いが、先に確認した「実詞」の定義である、単独で「文になることができる」に照らした場合、「実詞」に分類することが妥当なように思われる。また、『古代汉语虚词通释』で「虚詞」とされていた助動詞についても、『全訳漢辞海　第三版』も「実詞」としており、また数詞・代詞・副詞と同様の理由から「実詞」に分類すべきであろう。

ここで、前章で提起した問いである「置き字や助字をどのように説明すれば、理解しやすいの」かを、検討していきたい。第二章で示したように、助字には不統一な点や「ゆれ」が存在した。そこで、助字という言葉を省略、もしくは助字をそのまま虚詞に置き換えて説明した方が、直截で分かり易いのではないだろうか。

すなわち、漢文とは古代中国語であり、中国語には実詞と虚詞という分類がある。実詞は実質的な意味を持ち単独で文になることができる。虚詞は、文法・語法上の意味を表し、単独で文になることができない。それ故、漢文を日本語に合うように読み下す訓読の場合、読まない虚詞がでてくるので、これを置き字と言う。

助字という言葉を使わずに虚詞で説明することは、実質的な意味を持つ実詞と、文法・語法上の機能を担う虚詞との対比で教えることができるため、全体的な把握がしやすくなると思われる。

また、虚詞という中国語での品詞分類を使用することにより、漢文が古代中国語であることを、改めて意識させることになる。そうすれば、中国語の品詞を用いて説明することに対する抵抗感が減るものと考えられる。例えば、

第二章で挙げた教員採用試験の問題集で助字を説明する際、「英語の前置詞に相当する働きをする漢字」としていた。しかしここでは、虚詞の中に含まれる「介詞」という言葉を用いて説明した方が簡明であろう。

虚詞は、中国語の重要な特徴であり、外国人が現代中国語を学ぶ時のカギであるとされる。

中国語は虚詞がとりわけ豊富な言語であり、これは中国語の特性によって決定されている。中国語は、英語・フランス語・ロシア語などのような格表示や語形変化がある言語や、また日本語や朝鮮語のような膠着形式を持つ言語とも違い、虚詞こそが非常に重要な表現手段となる言語である。中国語の虚詞は閉鎖的なもので、普段使わないものを含めても千語程度に過ぎない。中国語の数百語の常用虚詞の意味と用法を把握することは、しっかりと中国語を習得するカギであると言うことができる。

汉语是虚词特别丰富的语言，这是由汉语特性决定。汉语不像英、法、俄等语言那样有形态标志和曲折变化，也不像日语和朝鲜语那样有黏着形式，虚词就成为汉语非常重要的表达手段。汉语的虚词是封闭型的，包括极不常用的不过1,000个左右，掌握汉语几百个常用虚词的意义和用法，可以说是学好汉语的关键。[21]

当然、漢文は古代中国語であるので、虚詞の重要性は現代中国語と同様である。それゆえ、漢文教育の場に虚詞の概念を導入することは、意味あることと思われる。

まとめ

小論では、置き字と助字について検討してきた。助字には、どの品詞が分類されるのかや、その定義について、曖昧な部分があった。この曖昧さは、助字に含まれる置き字を説明する際に、生徒の理解を妨げる恐れがある。

そこで小論では、助字に替えて、中国語の虚詞の概念を導入して説明することを提起した。虚詞は、実詞と対比

して説明することで、その全体的内容を把握しやすい。また、中国語文法上の品詞分類を使用することで、漢文が古代中国語であることを、改めて意識させることに繋がる、と考えられるからである。

漢文教育に用いられる書籍で虚詞に言及したものは、管見の限り多くはない。第一章で挙げた「国語総合」教科書でも、助字で説明しようとしていた。虚詞については、僅かに『漢辞海』などの漢和辞典で言及されているに過ぎない。小論を執筆した所以である。

注

（1）『高等学校　新訂国語総合　古典編』（第一学習社、二〇一四年）九九頁参照。

（2）田部井文雄・菅野礼行・江連隆・土屋泰男『漢文学習小事典』（大修館書店、一九七二年）八頁参照。

（3）注（1）所掲書九九頁参照。

（4）注（2）所掲書四七頁参照。

（5）注（2）所掲書七六頁参照。

（6）東京アカデミー『オープンセサミシリーズ　教員採用試験　ステップアップ問題集①　中学・高校　国語』（七賢出版、二〇一四年）二二九頁参照。

（7）注（6）所掲書二二七頁。例題の本文は以下の通り。なお、設問に用いるための傍線や波線は省略した。

造父方耨時、有子乗車過者、馬驚而不行。其子下車牽馬、父下推車、請造父助我推車。造父因收器、輟而寄載之、援其子父乗。乃始検轡持筴、未之用也、而馬咸驚矣。使造父而不能御、雖尽力労身、助之推車、馬猶不肯行也。今使身佚且寄載、有徳於人者、有術而御之也。（『韓非子』より）

（8）注（6）所掲書二二九頁参照。

（9）塚田勝郎「漢文離れと訓読の「ゆれ」」（田井部文雄編『漢文教育の諸相――研究と教育の視座から』大修館書店、二〇〇五年、第一章「漢文へのいざない　漢文訓読の現在」）四八頁参照。

（10）注（9）所掲書四八頁参照。

（11）注（9）所掲書四八～四九頁。塚田氏が指摘する各社間の相違点は、以下の通り。

①「楚人有鬻盾与矛者。」の「盾」の字体――「盾」が五社、「楯」が二社と分かれる。なお、タイトルは、全社が「矛盾」としている。

②「吾矛之利、……」の「利」の訓読――「とキコト」五社、「するどキコト」二社。

③「或曰、……」の「或」の送り仮名――「或ヒト」四社、「或ルヒト」三社。

④「陷子之盾、何如。」の「何如」の表記――「何如」五社、「何-如」と合符（-）を入れるのは二社。

⑤「其人弗能応也。」の「応」の送り仮名――「応フル」五社、「応フルコト」二社。

（12）注（9）所掲書五〇頁参照。

（13）注（9）所掲書五〇頁参照。

（14）注（9）所掲書四九頁参照。

（15）小川環樹・西田太一郎『漢文入門』（岩波書店、一九五七年）一一～一二頁参照。

（16）注（2）所掲書二三頁参照。

（17）何乐士・敖镜浩・王克仲・麦梅翅・王海棻『古代汉语虚词通释』（北京出版社、一九八五年）「前言」参照。

（18）刘月华・潘文娱・故韡『实用现代汉语语法（增订本）』（商务印书馆、二〇〇一年）四頁参照。

（19）戸川芳郎監修・佐藤進・濱口富士雄編『全訳漢辞海　第三版』（三省堂、二〇一一年）一六六四頁参照。

（20）三浦勝利『漢文を読むための助字小字典』（内山書店、一九九六年）一頁参照。

（21）李晓琪『现代汉语虚词讲义』（北京大学出版社、二〇〇五年）「序」参照。